

摂津鉄道（尼崎―池田間）、阪鶴鉄道（尼崎―福知山間）、播但鉄道（二十八年四月飾磨―生野銀山間）及び山陽鉄道の四鉄道が結んだ。鉄道網が県内・国内を結び、人びとの生活圏を広げ、兵庫県の姿を次第に変えていく。明治末・大正期には、私鉄電車の敷設が進んでいる。日露戦争のさなか阪神電気鉄道（現阪神電車）が大阪―宝塚間が開通した。同年兵庫電気軌道（山陽電車の前身）の兵庫・須磨間が開通している。

## 第二節 大正期の兵庫県―民主化、工業化

第一次世界大 大正時代は、第一次護憲運動のなか幕を開けた。大正元（一九二二）年十二月、第二次西園

### 戦と兵庫県

寺公望内閣が陸軍の二個師団増設の要求を拒んで総辞職した後、代わって桂太郎内閣が成立

した。藩閥（長州閥）・陸軍のリーダー桂（当時侍従長）の就任に対し、「閥族打破・憲政擁護」をスローガンとする国民的運動が全国に広がっていった。翌年二月、数十万の群衆が議会をとり囲む中、桂首相は退陣を余儀なくされた。当時の兵庫県は国民党王国だったが、県内では桂が呼び掛けた新党結成に、九人中八人の国民党議員が脱党し、桂新党に走った。これに対し、神戸では二月十三日夜、新開地に集まった数千の民衆が、桂側についた代議士小寺謙吉・横田孝史邸などを「変節代議士」と襲撃する事件が起こり、姫路から軍隊が出動する騒ぎとなった。



たらし、大正八年には一七三五社を数え、大戦前に比して約二・五倍に達した。特に資本金一〇万円以上の大会社の増加が目立った。これら多数の工場の分布をみると、その六割が神戸市に集中し、工業生産高も神戸市が県内の全生産高の約半分を占めて圧倒的優位を保っている。次いで武庫郡・川辺郡・尼崎市など阪神地帯の発展が看取されるとともに、加古郡・印南郡などの東播、淡路の津名郡など、企業の地方進出もめざましい。こうした好況の波は、船成金を生み、砂糖の輸入商から始まった鈴木商店を、三菱・三井財閥に匹敵する新興財閥に押し上げた。

このとき、日本の交戦国であったドイツとオーストリア＝ハンガリーの兵士を收容する施設が各地に置かれたが、彼らは、姫路の船場本徳寺・景福寺・阪田町妙行寺を経て、四年七月青野原俘虜收容所（小野市・加西市）に移動させられた（九年三月封鎖）。

社会運動の夜明け―労働運動・農民運動の進展

大戦による好景気は一方で、諸物価の上昇をもたらし人びとの暮らしを圧迫した。特に大正七年に入り、シベリア出兵を見込んだ買占め・売惜しみがあり、米価は激しく高騰した。神戸では、一升四〇銭（七月二十五日）だったものが、ひと月も経たぬうちに五五銭八厘（八月八日）となり、翌九日には六二銭八厘と大きく跳ね上がった。七月下旬に始まった富山県の一漁村で起こった「女一揆」とも呼ばれた女性たちの反乱は、瞬く間に全国に飛び火し、青森・岩手・秋田・沖繩を除く四三都道府県で起こったという。米騒動は県内でも、三市一町六カ村に及んだ。神戸では、鈴木商店や神戸新聞が焼き討ちにあい、姫路や篠山ささやまなどから軍隊が派遣され、未曾有の民衆騷擾そうじょう事件となった。

世界大戦中及び戦後の好況期を過ぎると、日本経済は次第に後退の傾向をたどる。戦後不況の下、工場労

働者の大量解雇、賃金の引下げ攻勢が続いた。このため労働者の生活は窮迫し、労働争議・小作争議が頻発した。

大正三年関西で最初の友愛会の支部（分会）の結成が神戸で進んだ。六年に神戸連合会が結成され、七年には賀川豊彦<sup>かがわとよひこ</sup>らを中心に労働者啓発のための機関誌「新神戸」が発刊されている。

第一次世界大戦後の戦後不況を背景に、大正十年、関西初のメーデーを契機に大阪から始まった争議の嵐は、五月尼崎に、七月さらに神戸に飛び火した。神戸では、三菱造船所と川崎造船所の労働者たちが、労働組合そして団体交渉権、待遇改善を求めてストライキに入った。さらに神戸製鋼所・台湾精糖・ダンロップなどの主要工場にも波及し、十日のデモには賀川豊彦ら日本労働組合総同盟友愛会の支援を得て三万人が参加したという。

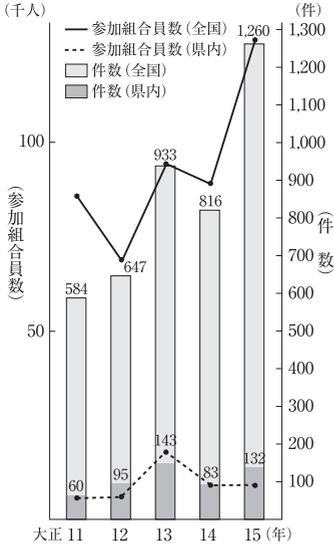


図7 労働争議件数  
 (『兵庫県百年史』より引用)

これに対し、会社側は工場封鎖で対抗し、三菱三社は一斉に休業に入った。姫路師団に加えて舞鶴鎮守府の陸戦隊や憲兵隊も動員された。このような弾圧に労働者側も力尽き、一カ月以上にわたった戦前最大の争議は、結局労働側の敗北に終わった。

農民運動も盛んになった。大戦期の物価高騰は農村部にも打撃を与え、多くの小作人の生活は窮迫しつつあった。小作料減免を求める争議が起こり、大正十年には四一五件に達し全国一となり、兵庫県は全国有数

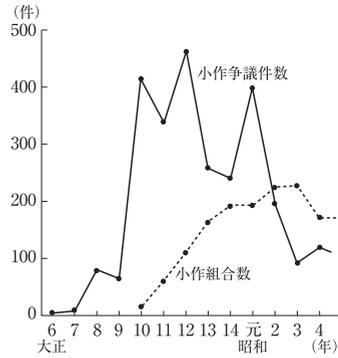


図8 小作争議件数  
 (『兵庫県百年史』より引用)

大していった。この頃、婦人も婦人参政権要求などを掲げて運動を展開した。

普選運動も、米騒動を経た第一次世界大戦後、民衆運動として大規模に展開する。大正九年の総選挙で普選挙を時期尚早とする原敬率いる政友会が大勝すると一時沈滞したが、十一年頃から再び高揚へと向かう。『神戸新聞』『神戸又新日報』などの新聞記者と海員組合や神戸印刷工組合などの労働団体が神戸普選同盟を結成し、大規模な運動を展開した。こうした運動の結果、大正十四年三月ついに男子普通選挙法が護憲三派内閣の下で成立した。

大正十二年九月一日、関東地方をマグニチュード七・九の大きな地震―関東大震災が襲った。十四年五月二十三日には、但馬一帯を円山川河口を震源とするマグニチュード六・八の烈しい地震が襲った。城崎町の全域と豊岡町の七〇%が焦土と化し、瀬戸・津居山・港村など沿岸の村々は津波に襲われた(北但大地震)。

大正十五年四月、地方行政に大きな力を持っていた郡役所が廃止された。

の小作争議地帯と呼ばれた。大正十一年四月には、神戸のキリスト教青年会館で、賀川豊彦・杉山元治郎らを指導者とする日本農民組合(日農)が結成された。以後、大正十二年には日農東播連合会、十三年には淡路連合会、十四年には西播連合会が結成された。

大正十三年四月、被差別部落の人も、自らの力で解放を勝ち取るうとして、京都で全国水平社を結成した。兵庫県では十一月、神戸で五〇〇人の参加を得て兵庫県水平社創立大会が開かれ、各地に組織を拡